



No. 185

ティークレイク

## Tea Break

寂寥郊野とともに

会員 正林 真之

それは、最初は単にふざけているのかと思った。そう、巷の爺さんたちが孫をからかったりしたときに言ったりする「いったい、お前は、どこの子だ?!」というやつである。子供も、幼い時は、顔を真っ赤にして反論する。自分は誰の子で、何歳で、どこに住んでいるといったような情報を、とにかくやみくもに爺さんにぶつけ、分かってもらおうとする。爺さんのほうは爺さんのほうで、分かっていながらにして、更にとほける。子供のほうは子供のほうで、更に躍起になり、その場の熱はどんどん増していく。ときに、爺さんのほうがやりすぎると、子供のほうが泣き出してしまふことすらある。

あまり良い遊びとは言えないが、「わざと分からないふりをする」というのは、年寄りが幼子をからかうときの定番である。これは本当は、「居ない居ないバア」の延長のような気もする。一瞬、居なくなったと思ったけれども、実は居る。そういった「一瞬、ギョッとする」意外性がまた、面白いのだと思う。けれども、「居ない居ないバア」だって、「居ない」の部分が多すぎれば、それはもはや遊びにはならない。

けれども私は、息子とともに訪問し、その実家にいた父が発した「お前は、誰だ?!」と息子に尋ねたその言葉が、単なる冗談だと、そう思っていたのである。息子のほうは、もうさすがに中学生なので、「その手には引っかけませんよ」といった表情で、自分の素性と系図を、しっかりと説明している。けれども、それをしている間に、少し遅れて到着した弟が、「お父さん。真之お兄ちゃんと、その息子の真和だよ」と言ったときに、もはや老人となった父が、「マサユキィ?! ちげっぺやっ!」と、しっかりとした方言で断言したその瞬間に、僕には全てが分かった。要は、「お前は、誰だ?!」

と私の息子に対して言ったと思ったのは全くの勘違いで、それはこの私自身に対して発せられたことなのであった。

老人性痴呆については、それが突然に起こることもあり、「まさか、自分の息子のことが分からなくなるなんて...」と、たいそう驚かれるケースもあるようであるが、私の場合は、実は2年ぐらい前に一度、ほんの一瞬ではあったが顔を忘れられたことがあったものだから、直ぐに腹落ちしたのだ。とはいえ、「あまりにも突然のことで...」とか、「まさか、自分の息子のことが分からなくなるなんて...」と驚き、すごくがっかりする人の気持ちは、本当によく理解できる。

その後、息子と一緒に温泉につかっているときに、「なあ、俺もお前のことを忘れる時が来るんだろうかね?!」と言ったひとりごとが聞こえてしまい、息子のほうは「我々のほうは大丈夫なんじゃないか」と、自らの今の気持ちを率直に言ってくれてしまった。そう、「あんたは、自分の子を忘れるような酷い父親じゃないよ」と、言ってくれているのだ。

実際、老人性痴呆のことなど、中学生にとってはどこかの遠い世界の話に等しいので、言っても無駄なことである。けれども、「忘れること」イコール「重要ではないこと」という前提があり、更に、弁理士という職業における正確かつ確かな知識の重要性を認識しているからこそ、気を遣ってくれている。実際、弁理士という父親の仕事を見ていればこそその話でもあるかもしれないが、自分の祖父よりも自分の父のほうが良い父親なんだから大丈夫だという感じで言ってくれている。

もちろん、親としては、こんな気遣いをしてくれることそれ自体が単純に嬉しいし、その気持ちは本当によく

わかる。実はこの自分とて、かつて、老人性痴呆のことを題材にした芥川賞作品である「寂寥郊野」というものを読んだときに、当然のことながら、自分の子のことを忘れる親を、ひどい親だと、単純にそう思ったものである。そう、若い時分の理解では、「忘れること」イコール「重要ではないこと」、もっと言えば「忘れる」イコール「悪いこと」というものでしかなく、その前提で物事を考えるから、どうしてもそのようになってしまうのだ。弁理士という「知識と知恵を元手にして仕事をしている職業」であればこそ、そしてそういった「知恵と知識を武器にして仕事をする職業である」ことを親から伝えられている子であればこそ、なおさらである。

けれども、これに関して言うと、脳科学者の黒川伊保子先生によれば、「脳というのは、無駄な機能は一切無い」ということで、老人性痴呆というのは、安らかに幸せに死ぬために誕生のときから脳に最初からプログラムされているもので、とても大事な機能なのだという。曰く「もし、すべて覚えていたら、皆とのお別れが寂しくて、辛くて、とてもではないけれども幸せには死ねないでしょう?!」、「全部きれいさっぱり忘れるから、幸せに死ぬ」ということである。要は、老人性痴呆というのは、安らかに幸せに死ぬための準備だということである。

よくよく考えてみれば、年をとればとるほど、知人もその周囲で次々に死んでいく。もしその全員をきちんと覚えていたりしたならば、辛くて、寂しくて、しょうがない。なので、脳のほうで気を遣って、きれいさっぱりと忘れさせてくれる。

配偶者や子供だって、良かったことも、悪かったこと

も、そのすべてをひっくるめて、全てきれいさっぱりと忘れてしまう。だからこそ、安らかに、幸せに死ぬというものだということである。

なので、脳科学的見地からすれば「老人性痴呆の場合はむしろ優先順位の高いほうから忘れる」ということであり、忘れられた君のほうとて、落ち込む必要など少しもないのだ。更に言えば、脳科学的見地からの正しい答えは、「であればこそ、別れるのが最も辛いお前のことを、忘れないわけがない」、言い換えれば「最も別れるのが辛いお前のことだからこそ、忘れるのだ」と、こういうことになる。目の前の君と別れる辛さを噛みしめながら死ぬなんて、そんな切ない状態のほうがむしろ不幸であり、考えたくない現実である。

しかしながら、「忘れること」イコール「重要ではないこと」、「忘れる」イコール「悪いこと」と思っている若者に、「忘れること」イコール「善」を教えても無意味なことぐらいは、分かっている。しかも今の君は、そういった考えの下で暫く生活したほうが良いし、また、今後のことを考えれば、是非ともそう考えるべきなのである。でも、この子もいつかは、老人性痴呆になってしまった僕が君のことを忘れてしまうことになる本当の意味を理解することができるようになる。だからこそ、そうしたときにまた、このような話をしてみたいとも思う。

けれども、もし君の成長よりも早く僕の老化が進み、君の成長よりも先に老人性痴呆のほうに来てしまって、それが叶わなかったようなときには、何かの折にこのティークレイクに触れてほしいものだと、しみりと、そう思うのである。